

# 文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

# だより



江戸高名会亭尽 湯嶋 歌川広重画

## 第15号／平成20年6月1日発行

食文化展にむけて	2
壱岐坂を彩る不死鳥	4
日本の博物館の父 町田久成と田中芳男	6
歴史館トピックス	7
平成19年度のあゆみ	8
平成20年度の催し	8



フェニックス・モザイク「永遠の友情」

写真提供：東洋学園大学

平成20年度特別展  
食文化展にむけて  
-博物館は食文化資料の宝庫-

### 1 はじめに

文京ふるさと歴史館は、地域の歴史や文化に関わる資料を中心に、収集保管・調査研究・普及活動(展示や講座、講演会など)などを行う博物館です。寄贈・購入などの方法により収集される博物館資料には、民具などの生活資料、錦絵などの絵画資料、古文書・書籍・地図、さらに古写真や絵葉書ほか、実にさまざまなものがあります。また発掘調査により出土した考古資料も所蔵しています。

こうした多様な資料を、「食文化」というキーワードで見つめなおしてみると、博物館は、とても豊富な食文化資料を所蔵していることがわかります。博物館は食文化資料の宝庫といっても過言ではありません。

それでは、当館で所蔵している食文化資料のうち、とくに地域に関連するものを、いくつかご紹介したいと思います。

### 2 博物館にある食文化資料



【資料1】御魚之通

当館は近世・近代を中心とした文書資料を多数所蔵しています。旗本など武家に関するものや、書簡や日記、証書類など多様なものがありますが、なかには食文化に関するものも散見されます。資料1の「御魚之通」(明治35年1月～)は、近世から近代にかけて本郷弓町(現・本郷1丁目)に暮らした家に伝えられたもので、「本郷区真砂町 魚理喜」からの納品および領収の記録帳簿と思われる。記録内容は、日付・魚名・数量・金額などで、5月を例にとると、平日・鰹・まぐろ・いさき他計3円31銭5厘が記され、どのような魚をいくらで購入したかがわかります。この資料により、当時本郷に住んでいた人々が、どのような魚を口にしていたか、食生活の一端を推測することができます。遠洋漁業が広く行われ、長距離輸送も可能な現在、冷凍技術の発達もあり、私たちは季節・漁獲地を問わずいろいろな魚を口にすることができます。しかし資料は、そうではない時代の食のあり方を示すものといえるでしょう。



【資料2】火事見舞いを運んだとされる切溜と「非常人名表」

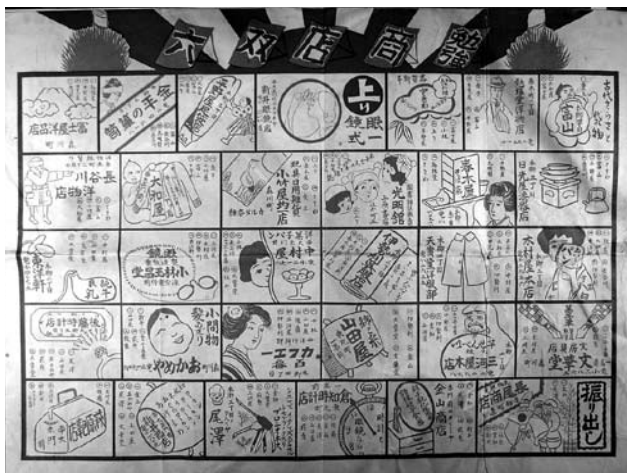
資料2は、かつて湯島で呉服店山加屋を経営した家に伝えられたもので、表題は「非常人名表」となっています。内容は明治23年(1890)6月、本郷区春木町(現・本郷3丁目)から発生した火災に関するもので、出火・類焼の過程・被災結果を伝えるとともに、「当日見舞者人名」として、人名・店名とともに、酒・弁当(煮しめ)・するめ・麦酒・玉子・菓子・団子・すし・干物・佃煮・手拭い等の食料をはじめとした見舞品の数々を記録しています。

また「切通シ 山加屋」と朱書きされた切溜(料理用の蓋付容器)は、火事見舞いの際に、近隣・得意先への食料(おにぎりや玉子焼きなど)運搬に使用されたと伝えられています。食を通した助け合いを物語る資料です。これらの資料は、非常時における食のあり方を考えさせるものといえるでしょう。



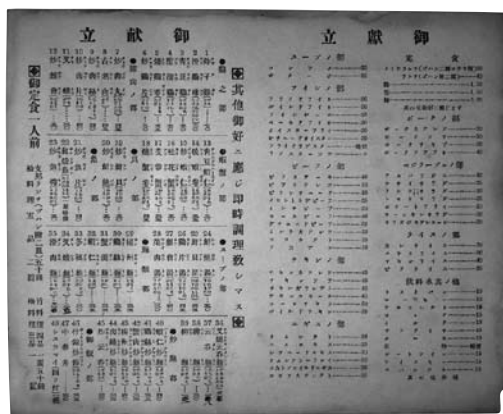
【資料3】江戸高名会亭尽 湯嶋 歌川広重画

当館は地域に関連する錦絵なども所蔵しており、なかには食文化の一端が描かれているものもあります。資料3「江戸高名会亭尽 湯嶋」は天保期(1830～1844)の作品で、当時の有名料理屋を描いたシリーズ作品のうちの一つです。絵には湯島にあった料理屋「松琴亭」の一室と、そこからの見事な眺めが描かれています。一室には、短冊に何かを記す眼鏡をかけた人物、書物を読む人物、杯を片手に持つ人物、話をしている様子の人物たち、外の景色を眺める人物などが、膳二つとともに描かれています。このような料理屋は、時に文人たちの交流の場となっていたことが知られており、作品はそうした情景を描いたものとも推測されます。他の錦絵や地誌にも、湯島界隈の料理屋が描かれており、今後それらを比較検討しながら調査をすすめていきたいと考えています。



【資料4】勉強商店双六

資料4は、本郷の商家より寄贈を受けた資料で、「振り出し」から「上がり」まで全31コマ、そのひとつひとつに本郷周辺の商店が描かれた双六です。味のあるイラストとともに、商店名・住所・電話番号・キャッチコピーなどが記され、なかには「牛鳥御料理 ときわ」「おいしいパン 木村屋本店」「洋菓子パン 中村屋」「西洋御料理 カフェー百番」「純良牛乳 東洋軒」など飲食店・食料品店も描かれています。発行年は不詳ですが、大正～戦前期(1912～45)頃に発行された資料と推定されます。遊び手にとっては、地域の商店・商品に関する情報が自然と身につくものだったのではないのでしょうか。現在、私たちが見ても往時の本郷を楽しむことができる地域資料の逸品といえるでしょう。



【資料5】支那西洋御料理目録

資料5は、小石川区柳町23番地にあった十三夜という料理店のメニューです。裏表紙には「本店料理品目ハ各部ヲ通ジテ数百種アレドモ其内最モ御嗜好ノ品ヲ選ビ裏面ニ御紹介仕候」とあります。また「出前も多少ニカ、ワラズ迅速ニ致シマス」とあり、出前もしていたことがわかります。メニューには、シューマイや炒飯など現代おなじみの中華料理や、ビーフを用いた「コロケット」(コロケカ)などの西洋料理、なんと全109種類もの料理名が価格とともに記されています。

また館所蔵の「小石川西洋料理組合員名簿」(昭和9年)という資料には、組合店のなかに「十三夜」の名が記され、その脇に手書きで「とみや」と読みが付されています。メニューもほぼ同時代のものと推定されます。それぞれの資料は、当時の地域の飲食店事情を知る上で貴重なものといえるでしょう。



【資料6】ままごと道具

資料6は、驚くほど精巧・緻密に作られ、見ているだけで楽しくなるような、魅力的なミニチュア道具です。かまどや鍋・釜はもちろん、おろし金やすり鉢・樽、さらにはお玉や団扇・台十能(炭火を運ぶ道具)まで用意され、材質もそれぞれにあわせ木や金属・陶磁などが用いられ、本物志向となっています。このような資料は、遊びを通じて食のための知識を自然に身につけることができる実に優れた食育教材といえるでしょう。



【資料7】給食を食べる子どもたち(区立元町小学校)

資料7は、旧区立元町小学校でのひとつコマで、裏書には「41年度 完全給食」とあります。『文京区立中学校教育二十年史』(昭和45年、文京区教育委員会)によると、昭和40年代前半、区立中学校などで「ミルク給食」から「完全給食」(主食+ミルク+おかずのセット)への切り替えが行われています。区立小学校も同様の状況にあったのでしょうか。

いずれにせよ、この資料からは、給食を前にした子どもたちの喜びの表情が、実にいきいきと伝わってきます。当館では、文京を写した多くの写真資料を所蔵しています。今後は食というテーマに絞り再調査していきたいと思えます。

### 3 まとめ 今年度の特別展

食は生命活動のもとであり、食文化は私たちの歴史・文化を理解し、さらに未来を考えるためのもっとも重要かつ普遍的なテーマのひとつです。

平成20年度特別展では、以上紹介したような食に関連する資料の展示を予定しています。時代・地域・環境などにより多様に展開している食文化、そして誰にとっても重要な「食」というテーマを、館蔵資料や地域資料を中心に展示できるよう現在、調査中です。みなさまのご協力をお願いいたします。

(東條幸太郎)

## 壱岐坂を彩る不死鳥 —建築家・今井兼次とフェニックス・モザイク—

当館では、昨年2月から3月にかけて、「文京・まち再発見2—近代建築 街角の造形デザイン—」と題した企画展を開催し、文京区内の近現代の建築から15例を選び展示しました。この展覧会では、日本の建築モダニズムの先駆けとなる堀口捨己（1895–1984）や山田守（1894–1966）をはじめ、1920年代から60年代にかけて建築家たちが手がけた独創的な作品も紹介したのですが、そのなかで異彩をはなっていたのが、今井兼次（1895–1987）が図案・制作を手がけた、「フェニックス・モザイク」と呼ばれる東洋学園大学本郷キャンパス（旧東洋女子短期大学本郷校舎）壁面のモザイク画です。

今井兼次は、機能性や合理性を重視した同時代の建築とは一線を画す、優れた作品を残した建築家として知られており、早稲田大学會津八一記念博物館（早稲田大学旧図書館、1925年、新宿区）、礪山美術館（1958年、長野県安曇野市）、遠山記念館（1970年、埼玉県比企郡川島町）などの設計を手がけています。

東洋学園大学の壁画は、モザイクならではの鮮やかな色合いが印象的な、存在感あふれる作品ですが、校舎建物の設計を今井自身が行ってないせいか、ほかの建築作品に比べると、それほど注目されてこなかったように思われます。そこで、今回はこのモザイク作品について、企画展では紹介しきれなかったことも含めて解説します。

東洋学園大学は、大正15年（1926）11月開校の東洋女子歯科医学専門学校を前身とし、昭和3年（1928）に関東大震災後の復興街路である新壱岐坂（壱岐坂通り）と旧壱岐坂が交わる一角、本郷元町二丁目63番地（現・本郷一丁目26番）に洋風の校舎が完成しています。戦後、東洋女子短期大学が新たに発足し、それから10年の節目にあたる昭和35年（1960）、藤田組（現・株式会社フジタ）の設計・施工でRC構造の校舎に建て替えられることになりました。東洋学園大学に保存されている当時の文書や学校新聞によれば、このときに学校の「理想の

シンボル」を新校舎の壁面に取り付けることが決められており、どのような経緯なのかははっきりとしたことはわかりませんが、当時早稲田大学教授を務めていた今井兼次にその制作が依頼されています。

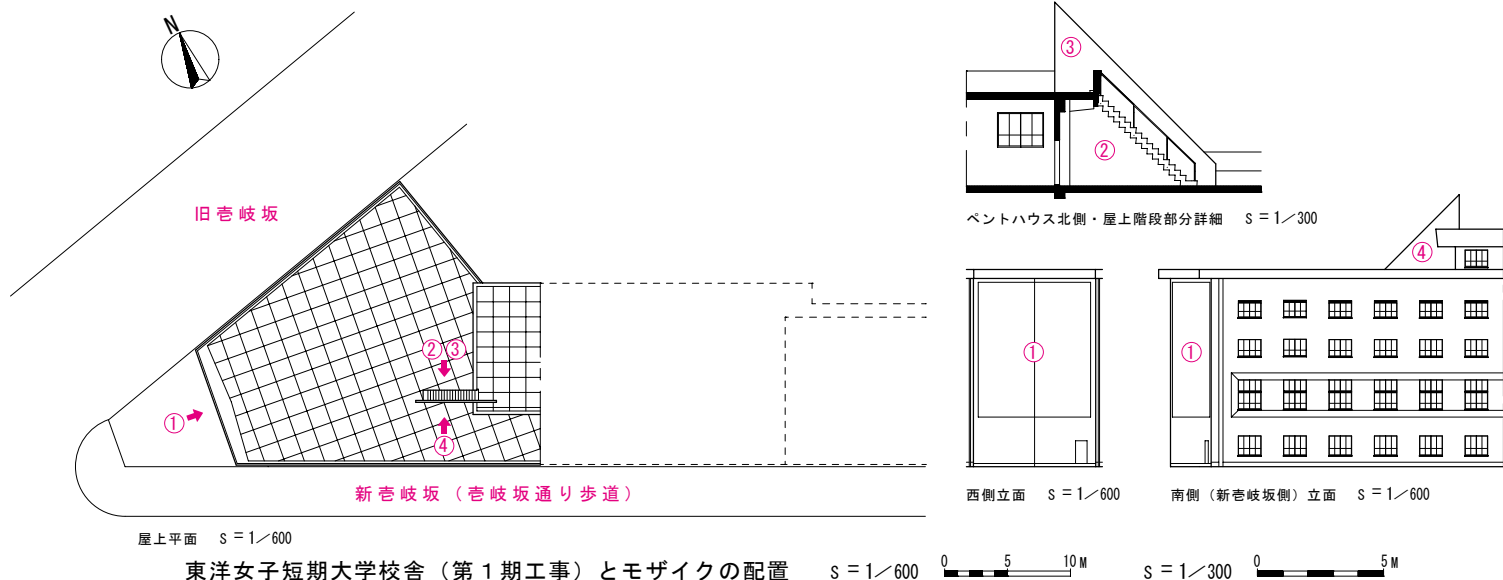
仕事を引き受けた今井は、このモニュメンタルな建築の装飾を、あえて用をなさない陶器のかけら（陶片）を使用したモザイクに仕上げることにします。当時、在校生や卒業生らに対して、デザインのヒントになるような意見と陶器の破片の提供を呼びかけた文書が出されていますが、このように大学関係者の協力を得て集められた陶片のひとつひとつが、単なる材料としてのみならず、作品を規定する重要なファクターにもなっているのです。今井が記した「秘話随想」（『早稲田学報』1963年1月号、早稲田大学校友会）では、こう述べられています。

「これらの陶片には比較的高価なものも挿入されているが、大半は不用のものか安価なものばかりである。それにもかかわらず、個々の陶片がその品質の優劣の格差を越えて、互に全体の造形美のために支えあっているその様相は、あたかも生ける社会の善意の共同体の心をゆさぶり示しているようにさえ思われてならない。」

もっとも、陶片モザイクの最初の実作は、この東洋女子短期大学ではなく、今井が設計を手がけ昭和34年（1959）に完成した大多喜町庁舎（千葉県夷隅郡）になります。自身初の日本建築学会賞に輝くこの建築作品で、信楽焼の火鉢や倉庫に眠っていた陶器の破片を用い、表現に風土性を取り込んだ陶片モザイクを完成させています。

東洋女子短期大学のモザイクも、そうした試みの延長線上にあると考えられますが、この連作を通じて、価値を喪失した陶片が一体となって、新たな意味性を帯びて甦り、力強く生命をはなつ芸術作品へと高められることを確信したのでしょう。東洋女子短期大学での制作時から、自らが手がけた陶片モザイクを、「フェニックス・モザイク」の名で呼ぶようになりました。

東洋女子短期大学でのフェニックス・モザイクの制作は、校舎建設工事とあわせて作業が進められ、下の図に示した通り、昭和36年（1961）に完工した第1期工事では、①校舎西側壁面、②ペントハウス（塔屋）北側壁面、③校舎屋上階段、④ペントハウス南側壁面に構築されています。続いて、昭和39年



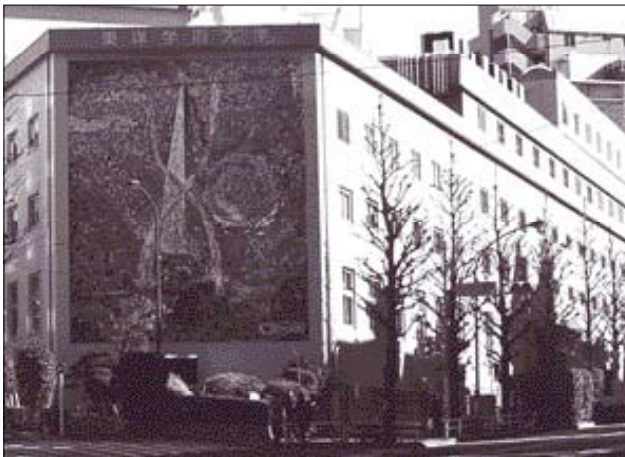
(1964)完工の第3期工事では新巻岐坂に面した⑤南側壁面東端部に制作され、あわせて5つの美しい作品が、大学に関わるすべての人たちに捧げられました。

この5つのモザイクについて、昭和39年1月発行のパンフレット『新校舎竣工記念』(東洋学園大学所蔵)に今井自らが寄せた解説を見ると、それぞれが独立したテーマをもった作品として制作されたようで、『今井兼次作品集 旅路』(今井兼次先生古稀記念の会、1968年)の解説文などから、それぞれ次の通りの主題であったと考えられます。

主題	年代
① 「岩間がくれの堇花」	昭和36年(第1期工事)
② 「思い出の四季」	昭和36年(第1期工事)
③ 「芽生えから開花」	昭和36年(第1期工事)
④ 「永遠の友情」	昭和36年(第1期工事)
⑤ 「繁栄の樹」	昭和39年(第3期工事)

このなかで、とりわけ衆目を集めるのが、西壁(①)の大作「岩間がくれの堇花」です。今井によれば、この作品は、学校のたたずまいから受けた印象をもとに、ウィリアム・ワーズワース(1770-1850)の詩に着想したものといます。画面上側に描かれる星は、苔むす岩陰で密やかに咲くスマイレ花の美しさをなぞらえたもので、天上にただ一つ輝きを放ち、清らかな学舎と若い学生たちの未来を祝福しているようにも見えます。さらに、ヨーロッパへの視察留学の際、ストックホルムに彫刻家カール・ミレス(1875-1955)のアトリエを訪ね感銘を受けた、「太陽の輝く間、私をして働かしめよ」という言葉をイメージした図像が画面右に配され、中央には大きく交差する2本のダイナミックな曲線が描かれています。

ところで、今井兼次の作品について、構想段階や制作途中で描かれたスケッチ、エスキスが数多く残されており、先の企画展では、所蔵者の今井兼介氏と寄託先の多摩美術大学のご好意で、東洋女子短期大学のモザイクのスケッチ7点を展示しました。そのなかで、「岩間がくれの堇花」の図案を描いたスケッチの1枚には2本の曲線は表現されておらず、このことから、当初それらは構想になく、イメージを具体化していく過程で追加されたものと推測されます。このように描き加えられた2本の曲線は、画面に緊張感を生み作品の印象度を高めるとともに、画面を構成するそれぞれの図像を視覚的に結びつけ、全体にまとまりを与えています。



写真提供: 東洋学園大学

フェニックス・モザイク「岩間がくれの堇花」  
(旧東洋女子短期大学本郷校舎外観)

また、「岩間がくれの堇花」の特徴の一つに、画面右下に制作年代とサインが入れていることがあげられます。サインは3段で構成され、上段に「I M A I」、中段に“羊の頭”(陶像)、下段に「T T」の字をあてます。今井兼介氏のご教示によれば、おそらく“羊の頭”は今井兼次の生年の干支にちなみ、「T T」はフェニックス・モザイク制作の現場で今井の仕事をサポートした田中昇(1934-1982、洋画家)と竹内成志(後に多摩美術大学教授)のイニシャルではないかとのことです。そうだとすれば、このサインは、作品に対する自負心の表出であると同時に、作品づくりは決して一人だけでは行えない、さまざまな人たちが関りはじめて完成させられることを、感謝の念を込めて表したとも考えられます。

フェニックス・モザイクが制作された建物を時系列に並べると、次の通りとなります。

建築名	年代	所在地
大多喜町庁舎	昭和34年	夷隅郡〈現存〉
東洋女子短期大学校舎 ※建築設計: 藤田組/第1期工事	昭和36年	文京区〈一部現存〉
大阪本町ビル東邦商事 ※建築設計: 日建設計	昭和36年	大阪市〈現存せず〉
日本26聖人殉教記念施設 (日本二十六聖人記念館)	昭和37年	長崎市〈現存〉
東洋女子短期大学校舎 ※建築設計: 藤田組/第3期工事	昭和39年	文京区〈現存せず〉
桃華楽堂 (香淳皇后還暦記念ホール)	昭和41年	千代田区〈現存〉

昭和30年代を中心とする限られた時期ではありますが、大多喜町庁舎にはじまるモザイクの試みは、2度目となる日本建築学会賞受賞を果たし、代表作ともいわれる日本26聖人殉教記念施設へと結実し、桃華楽堂では日本芸術院賞とBCS賞に輝くなど、高い評価を得ます。その過程で、陶片を使用する制作手法が「フェニックス・モザイク」として確立した東洋女子短期大学の作品は、この時期の今井兼次の充実した創作活動を振り返るとき、いま一度見直してみなければならぬ重要な作品と言えるでしょう。

その後、東洋学園大学が開学し、平成17年(2005)に新校舎の建設のために、屋上と南側東端壁のモザイクは解体されましたが、建物の西側に「岩間がくれの堇花」が保存されました。現在、制作から半世紀ちかい歳月が過ぎたこのモザイクは、学校の「理想のシンボル」としてのみならず、壱岐坂通りの街並みに欠くことのできない景観要素にもなっており、平成19年度に第7回文の京都市景観賞(景観創造賞)を受賞しました。

このように、芸術や文化財と呼ばれるものは、博物館や美術館のなかだけにだけあるのではなく、意外と身近なところにも存在しています。当館では、今後とも、館内にある資料を展示するのみならず、区内の各所にある歴史資料や美術作品を積極的に取り上げ、紹介していきたいと思えます。

(北田建二)

付記 本稿は、平成18年度企画展の資料調査、ならびに第174回江戸東京フォーラムでの発表をもとに執筆しました。資料の閲覧、展示等で、今井兼介氏をはじめ、多摩美術大学美術館、東洋学園大学広報室ほか、多くの方々からご協力を賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。なお、東洋学園大学のフェニックス・モザイクについては、『東洋学園八十年の歩み』(東洋学園大学、2007年)と本年4月開設の東洋学園史料室の展示でも、詳しく紹介されています。あわせてご覧ください。

## 日本の博物館の父 町田久成と田中芳男 -田村家資料から-

わが国における博物館黎明期において、「父」と呼ばれるべき人物が二人存在することをご存知でしょうか。一人は町田久成(1838-97)、もう一人は田中芳男(1838-1916)です。詳しい経歴等は参考文献に譲るとして、どちらも同じ天保9年生まれで、明治初期における博物館・博覧会行政に精力的に携りました。二人の学問の違い、理想の違いに注目した論考は少なく、『博物館の誕生』に博物館(現、東京国立博物館)開館直前に、田中ら博覧会事務局による町田ら博物館への敵対行為が述べられたくらいです。異分野における共同事業を遂行した人物としてどちらにも尊敬の念を抱いていた私にとっては驚きであり、人間関係まで見抜くことができなかつたと反省したところでした。私自身は、本草・博物学者である田中ののこした資料を頻りに利用している手前、あるいは文京(本郷金助町)の住民であったという理由でも田中の肩を持ちたいのですが、それはともかく、二人は本当に陰悪な仲だったのでしょか。

昨年度(平成19年度)の当館学芸職員は、滞っていた館蔵資料の調査を集中的に行い、整理済みの資料も適宜再調査しました。この過程で、上記の疑問に答えてくれそうな資料を、平成元年に当館に寄贈された田村義質の文書を中心とする田村家資料のなかから見つけました。田村義質のことは、過去の特別展「本郷に生きたサムライの生涯」において、山林行政や内国博覧会の審査書記を行ったと紹介されましたが、図1の書簡が「内国勸業博覧会審査関係書類」(田村家文書1-6-6)として一括された書類のなかに紛れ込んでいました。内国勸業博覧会の審査部長を務めた田中から審査書記である田村への書簡です。短いものなので、以下に全文を翻刻します。

拝見仕候処自分持之事ハ分明なれ共、町田公之分ハ何分不明事付、後刻本省へ罷出候と弁解を申候事にて御配り相成候也。

二月五日  
審査書記御中 御答 田中芳男

末尾の署名の書体、少し丸みを帯びた文字を見ても確かに田中の自筆とわかります。本書簡の前に、田村から田中へ何かしらの質問があって、それに対する回答という形式になっています。本書簡の前には「薦告案」に対する回答書簡が続く、受取は町田かあるいは「審査書記」を勤めた田村宛が多いので、本書簡も博覧会の推薦文案に関する問題と考えられます。内容は、自分の持ち分のことはわかるが、「町田公」すなわちかつての田中の上司であり、審査部長である町田久成の担当する分については「不明了(隙)」であるから、後ほど本省に出向いたとき弁明しますという答えを呈しています。ここでいう「本省」とは、農商務省を指すと考えられます。明治14年(1881)4月、博覧会事務局は、内務省から農商務省へと移管され、田中は農商務省の農務局長として博覧会の審査部長を務めることとなります。一方町田は、内務省に留まりひたすら博物館開館への道を目指しています。仲が悪かったとしたら、このときがMAXであったでしょう。博物館の予定で建てられた建物を、内国博覧会に転用するなど、順調であったはずの博物館が、博覧会にのっ

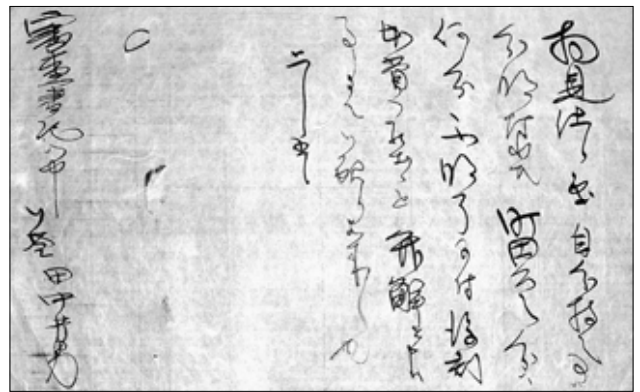


図1 田中芳男より田村義質への回答書簡

られそうな気配を呈していた時期に当たります。推薦文案一つでも町田と田中の意見に不一致があったのではないのでしょうか。

図2は、同じ時期、第2回内国博のときの「審査部人名録」(田村家文書1-6-5)です。本資料は、当館特別展の図録では「明治23年推定」としていますが、例えば明治16年に農商務省を退職しているはずの田中が「農務」とある点、同15年に初代博物館館長を務めた後に出家して博物館行政から引退した町田の名がある点、何より明治19年に亡くなった洋学者・近藤真琴の名も見られる点などから、本資料は、第3回内国博開催の明治23年ではなく、明治14年当時(第2回)の名簿と考えられます。

町田の専門は人文系、田中の専門は自然系であり、異分野における研究活動は、それぞれの分野への理解不足から仕事の進め方等些細なことで衝突しがちです。何をもちて博物館の収蔵品とするか、どこに収蔵するかなど、おそらく日常的なレベルまで色々と衝突していたことは想像に難くありません。そのうえ、半永久的に資料を保存する博物館の開館と、一時的なイベントである内国博の開催が、ほとんど同時期に同じ場所で行われるという物理的な無理難題を国家的行事として敢行することが決められ、このプレッシャーによってお互いを尊重するというような心や時間の余裕はなくなりましたので



図2「審査部人名録」。3行目が町田久成、4行目が田中芳男

でしょう。仲が悪いとまではいわないまでも、以上のような状況下で思わず、「町田公のことは分らない」と、突っ放した言い方をしてしまったのではないのでしょうか。歴史を変える重要な事実ではないけれども、資料によって人物の心の動きを想像させる、このような資料も歴史館にはまだまだたくさんあると思います。

(平野 恵)

### 参考文献

- 『本郷に生きたサムライの生涯』文京ふるさと歴史館、1997
- 『日本の博物館の父田中芳男展』飯田市美術博物館、1999
- 田中義信『田中芳男十話』田中芳男を知る会、2000
- 関秀夫『博物館の誕生 町田久成と東京帝室博物館』岩波新書、2005

### 文京ミュージズフェスタ2007に出展

平成19年度に文京区内にある28の美術館・博物館・史跡・庭園などが集まって「文の京ミュージアム・ネットワーク(略称:文京ミュージズネット)」が設立されました。案内マップが制作され、11月16日から23日には、イベント「文京ミュージズフェスタ2007 人と地域と文化をむすぶ」(会場:文京シビックセンター1階ギャラリーシビック&アートサロン)が開催されました。当館も出展し、歴史館や友の会の活動、刊行物、周辺史跡の紹介など、友の会の協力を得てパネル展示や資料の配布を中心にPRを行いました。会期中には記念講演会、コンサート、スタンプラリーも開催され、6,517人が来場しました。



フェスタ会場 歴史館のブース

### 駕籠町小学校4年生のぬり絵作品を展示

平成20年1月5日～2月15日、色鮮やかで個性的なぬり絵作品16点が歴史館のエントランスに展示されました。これは文京区立駕籠町小学校4年生と先生が授業で制作した『江戸名所図会』のうち「猫狸橋」を題材にしたぬり絵です。もともとは江戸時代の白黒の挿絵ですが、風にゆれるススキ、キセルをふかす人、川や橋の様子など、色を塗ることで地域の昔の姿が鮮やかに甦っていました。たいへん興味深い地域学習の事例として紹介させていただきました。



ぬり絵作品「昔のくらしやまちを知ろう」

### 平成19年度は資料整理強化期間！

博物館において収蔵庫の環境保全や資料の整理・調査はたいへん重要な任務です。そこで昨年度は1年間、収蔵資料の整理や、収蔵庫の棚卸しに館を挙げて取り組みました。地下収蔵庫は、全ての資料を運び出して棚や床・天井を清掃し、資料1点1点の汚れや埃を拭き取ったあと庫内に戻す、という地道な作業を1か月半かけて行いました。また寄贈資料については、所在確認、資料封筒への詳細な表書き、目録作成、写真撮影、データベース入力などの再整理・調査作業を行いました。この成果は今後、常設展示や特別展、収蔵品展などに反映し、さらなる収蔵資料の活用を図っていく予定です。



富士講関係資料

### 常設展示室の一部展示替

平成20年3月末、1・2階常設展示室の資料約100点の入れ替え、パネルや写真、キャプションの追加・更新など、一部展示替を行いました。活版印刷関係資料、富士講関係資料(区指定文化財)、江戸文人関係資料、牛天神北野神社・龍門寺跡出土の壺などの、新たな資料を展示しました。また2階には「ミニ企画コーナー」を新設、その第1弾は「子どもの遊び 小さな世界」で、なつかしい遊びや、区民から寄贈されたおもちゃなどを7月21日まで展示しています。小さなコーナーですが、今後もさまざまなテーマでの特集展示、新収蔵資料や学芸員おすすめの資料などを、年3回程度、期間限定で展示していく予定です。



ミニ企画コーナー 子どもの遊び

### 歴史館に行こう！

当館では小・中学生のための地域学習のお手伝いをしています。区内の遺跡や坂道、ゆかりの文学者、昔の暮らし調べなど、さまざまなテーマで学校単位での見学時などに展示解説を実施しています。また史跡めぐりや文学散歩など一般のグループ・団体見学向けの解説も行っていますので、ぜひご利用ください(要申込。事前にご相談ください)。



小学校見学の展示解説

## 平成19年度のあゆみ

### 小・中学生のための歴史教室

「ミニかけ軸をつくろう！」

会場:文京区男女平等センター研修室B

- ◆第1回 7月31日(火) 参加者数……17人
- ◆第2回 8月2日(木) 参加者数……23人



歴史教室

### 区制60周年記念 歴史講座

「江戸から学ぶ文京のまちづくり」/竹内誠氏(江戸東京博物館館長)

- ◆11月10日(土) 会場:文京シビックホール小ホール 参加者数……203人



歴史講座

### 史跡めぐり

- ◆第1回 6月6日(水) 江戸の名残 湯島を歩く 参加者数……36人
- ◆第2回 10月23日(火) 駒込地区の古社寺と東洋文庫 参加者数……48人
- ◆第3回 3月14日(金) お江戸の神仏を訪ねて 参加者数……42人



史跡めぐり(3/14)

## 平成20年度の催し

### 小・中学生のための歴史教室

7月30日(水)、31日(木)午後

夏休み期間に行う、歴史や文化を学習する体験教室です。要申込(往復はがきにて)。

### 特別展 文京の食文化(仮)

10月25日(土)～12月7日(日)※11月3日(文化の日)は無料公開日

館蔵資料や地域に関する資料を、食文化というキーワードを通して見つめなおし、展示します。

### 史跡めぐり

歴史館友の会文京まち案内ボランティアが、区内の史跡等をご案内します。年3回(7月、10月、3月)開催予定。要申込(往復はがきにて)。参加費40円。

### 歴史講座 歴史とエコロジーからよむ東京の都市空間

9月13日(土) 午後2時～4時

陣内秀信氏(法政大学デザイン工学部教授)による講演を行います。要申込(往復はがきにて)。定員100人(超えた場合は抽選)。参加費200円。

### 収蔵企画展 地域資料としての絵画(仮)

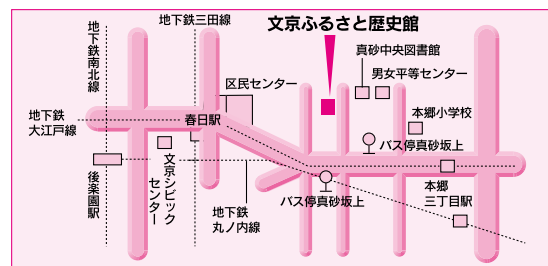
平成21年2月14日(土)～3月22日(日)

収蔵資料のなかから絵画資料を中心に展示します。「地域」という視点で絵画作品を見なおしたとき、新たな発見があるかもしれません。

※事業内容の詳細は「区報ぶんきょう」および歴史館ホームページにてお知らせします。

## 利用のご案内

- ◆開館時間: 午前10時から午後5時まで
- ◆休館日: 月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日) くんじょう期間、年末年始
- ◆入館料: 一般個人100円、団体(20人以上)70円  
中学生以下・65歳以上無料  
\*特別展は別に定めます
- ◆交通: 地下鉄/丸ノ内線・大江戸線本郷三丁目駅、または三田線・大江戸線春日駅から徒歩5分  
バス/都02 [上69]真砂坂上から徒歩1分
- ◆ホームページ: <http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>



### 文京ふるさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号 電話(03)3818-7221